

1

# 達古武地域自然再生事業地における エゾシカの被食状況について

環境省釧路自然環境事務所



2

## 達古武地域自然再生事業実施計画について



- ❑ 達古武湖北岸にある環境省所管のカラマツ林（約99ha）を自然林へ再生
- ❑ H17 に実施計画策定し、再生事業を進めている。
- ❑ 主な事業内容
  - ❖ 地表処理による再生
  - ❖ 種苗生産と植栽による再生
  - ❖ 防鹿柵の設置
  - ❖ 間伐の実施
  - ❖ 生態系評価モニタリング
  - ❖ 環境学習プログラムの実施

3

## エゾシカによる広葉樹稚樹への影響の把握

### □ エゾシカの高い利用

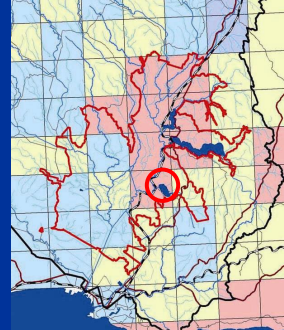
- ❖ 対象地域はエゾシカの高利用地域となっている。特に冬季は越冬地として利用されている。

### □ 植栽木の保全策の実施

- ❖ エゾシカによる植栽木の被食の影響が大きく、植栽地に防鹿柵を設置

### □ 柵外ではエゾシカの影響を把握

- ❖ 自生稚樹を追跡し、生死・樹高の推移・食痕の有無を記録。特に捕獲事業実施前後から詳細調査を実施。



SPUE(目撃密度)2008-2010年

赤が高密度地域。道総研環境科学研究センターの狩猟統計データより作成

4

## 事業開始時と現在の稚樹密度の比較①

調査  
手法

- 保全エリアの稚樹の密度を10年前と比較
- 5m×5m・64区で調査



※調査区サイズ 1区：5×5m

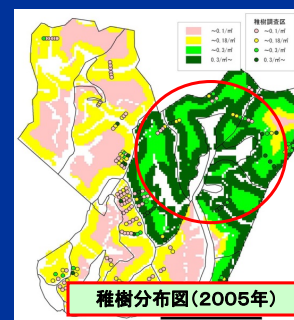
※稚樹・幼木の定義

稚樹：樹高150cm未満

幼木：樹高150cm以上の下層木

※計測項目

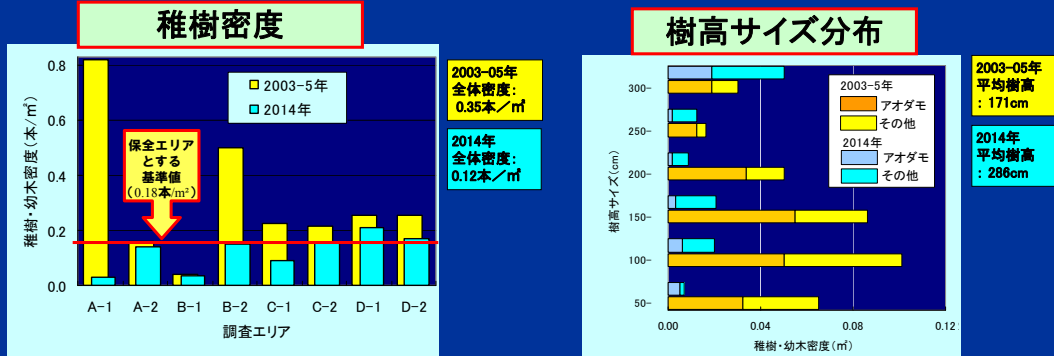
樹種・高さ・食痕(新旧)



稚樹分布図(2005年)

5

## 事業開始時と現在の稚樹密度の比較②



### 調査結果

- ❑ 密度は0.35本/m<sup>2</sup>から0.12本/m<sup>2</sup>と10年前に比べて低下
- ❑ エゾシカの影響を受けやすい樹高250cm未満、アオダモの減少が顕著であった。
- ❑ エゾシカによる稚樹への影響が大きい。今後も続いたら要対策。

6

## 捕獲事業開始後のエゾシカによる影響の把握

### 対象手法

- ❑ 6エリアの稚樹186本に2014年に標識し、2015年に再調査。
- ❑ 樹種・高さ・被食状況(新旧)を記録

樹種	本数
アオダモ	47
サウシバ	37
オオモミジ	17
イタヤカエデ	14
ヤチダモ	14
ミズナラ	11
総計	186



アオダモ食痕

### 新規食痕の割合と平均樹高成長量

樹種	2014年	2015年	平均成長量
アオダモ	34%	77%	-4.0
サウシバ	35%	84%	-5.1
オオモミジ	18%	47%	-5.9
イタヤカエデ	29%	36%	-4.4
ヤチダモ	14%	58%	-2.3
ミズナラ	36%	75%	-6.0
総計	25%	63%	-4.8

### 調査結果

- ❑ 2014年は捕獲の効果か、食痕率が全体的に低かった。
- ❑ 2015年は食痕が大きく増加。昨年より積雪が多く、被食されやすい状況。
- ❑ 夏季の食痕(33%)も多く、通年利用が見られた。
- ❑ 積雪の影響も含めて、今後の推移を把握する予定。

## エゾシカの影響のまとめ

### □ エゾシカの累積的な影響

- ❖ 10年前に比べて保全エリアの稚樹密度は減少しており、稚樹への影響が長期的に累積して生じてきたといえる。

### □ エゾシカ捕獲事業による効果

- ❖ 捕獲開始後の2014年は食痕率の低下が見られたが、2015年は増加した。
- ❖ 捕獲の効果に加えて、積雪量や夏季の利用状況も影響すると思われ、長期的に効果を見ていく必要がある。